

公立中学校国語科における国際教育の開発と実践

西 千 裕, 吉 田 夏 帆

(兵庫教育大学大学院, 兵庫教育大学)

1. 研究の背景

日本においては、国際化の状況に対応するべく、以下の点に留意して、学校教育を進めていく必要があるとしている（文部科学省 1996）。

- ①広い視野を持ち、異文化を理解するとともに、これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること。
- ②国際理解のためにも、日本人として、また、個人としての自己の確立を図ること。
- ③国際社会において、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる基礎的な力を育成する。

また、「初等中等教育における国際教育推進検討会」では、異文化理解・交流にとどまっていた国際理解教育から、「国際社会において、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎を育成するための教育」と定義される「国際教育」へ、という方向性が打ち出され、国際教育は2002年度学習指導要領の基本理念である「生きる力」を育むことに直接つながるものと位置付けられた。しかしながら、「授業実践」「教員指導力」「海外派遣教員活用」「外部資源の活用」「学校の多国籍化・多文化化」「海外子女教育」の観点によると、多くの課題が山積している（文部科学省 2005）。そのため、「学校教育活動における国際教育の充実」の「(1) 学びが広がり深まる授業づくり」の方策として、下記を挙げている（文部科学省 2005）。

- 各教科等や総合的な学習の時間の相互関連性を意識した授業づくり・先進的な取組事例の情報提供
- 学習内容・方法等の開発・普及・情報通信技術の活用・言語教育の充実

上記の方策内の「言語教育の充実」の中に、国際教育と外国語教育、国語教育とのつながりに関して、「国語を用いてものごとを正確に理解し適切に表現する能力を育成するとともに、伝え合う力を高めることは極めて重要である」とある。また、「これからの時代に求められる国語力」の中では、「各国の文化と伝統の中心は、それぞれの国語であり、その意味で国際化の時代に極めて重要なのが国語力である」ともある（文部科学省 2004）。これらのことから、国語の授業で身につけるべき力は、国際教育に関する取り組みとも関連していると考えられる。他方で、中学校学習指導要領での国際教育の取り扱いに関する教科は、総合的な学習の時間の他に、外国語・社会・道徳のみの記載にとどまり、「授業実践」「教育指導力」の課題は残るままであろう。近年でも、「グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成」が今後の教育政策に関する基本的な方針の一つとして挙げられている（文部科学省 2023）。

以上のような背景を踏まえ、本研究では、国語科における国際教育の授業実践の一助となる単元を開発及び実践し、その有用性を検証することを目的とする。

なお、国際教育を示す用語が様々にあるが、本研究では「国際化した社会において、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎を育成するための教育」を指す「国際教育」という用語を用いることとする（文部科学省 2005）。

2. 研究の手順

まず、研究対象校が採用している中学校国語科「光村図書」の中で国際教育に適した教材を選択し、授業実践を行う学年を決定した。次に、その学年に所属する生徒の国際教育に対する理解度や態度等を確認するため、「アンケート調査」を実施した。そして、その結果を踏まえ、中学校国語科においては、いかなる国際教育実践が有効的であ

るかを検討し、教材研究および単元開発を行った。最後に、その開発した単元を用いた授業実践を行い、対象生徒の成果物や授業内での振り返りシートを活用して、本授業実践の有用性の検証を試みた。

3. 授業実践

(1) 授業実践の対象と目標の設定

OECD では、2018 年に「生徒の学習到達度調査」(PISA) で「グローバルコンピテンス」を調査対象としている。グローバルコンピテンスとは、以下の能力を示す (PISA 2018)。

- ①地域、グローバルそして異文化の問題を考察すること
- ②他者の視点と世界観を理解し、その価値を認めること
- ③異文化の人々とオープンに適切かつ実効性のある意思の疎通を行うこと
- ④“well-being”と持続可能な発展のために行動を起こすこと

上記に関して、文部科学省は「これからの時代に求められる能力や、カリキュラムデザインの在り方については、日本の知見も生かし共に検討していきたい」(文部科学省 2016) と 2030 年に向けた教育の在り方を検討している。そのことから、国際教育の授業を開発、実践していく中で 1 つの指標としてグローバルコンピテンスの考え方を採用することができるだろう。そのため、今回の国語科の授業実践は、教科書教材の内容や実践期間を踏まえ、①②を育成することを授業実践の目標とする。本授業実践の対象の詳細については表 1 にて示す。

表 1. 授業実践の対象

対 象 教 科 書	光村図書「国語 3」
対 象 教 材	「作られた『物語』を超えて」(著者：山極寿一) 「説得力のある構成を考えよう スピーチで社会に思いを届ける 資料 リオの伝説のスピーチ」
対 象 期 間	2023 年 9 月 12 日 ~2023 年 10 月 19 日 (うち 6 時間)
対 象 者	兵庫県公立中学校の 3 年生 (2 クラス, 82 名)

(2) 教材観

本単元では、国語科の「読むこと：作られた『物語』を超えて」, 「話す・聞くこと：説得力のある構成を考えよう スピーチで社会に思いを届ける 資料 リオの伝説のスピーチ」という単元を中心に、視野を広げ、言語能力を豊かにすることをねらいとし、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の育成を図る。

「作られた『物語』を超えて」では、野生動物の行動の意味を人間が誤解し、都合の良い「物語」を作ることで起きた動物の悲劇を、ゴリラを事例に紹介している。そのような誤解に基づく「物語」は人間社会にも悲劇をもたらしている。そのため、同論説文では、「作られた『物語』を超えて」, その向こうにある真実を知ろうとすることが、新しい世界と出会うための鍵であるという筆者の意見が語られている。抽象と具体の関係性について理解を深め、筆者の主張に至るまでの論理の展開を吟味できるだけでなく、自分が作り出している「物語」を吟味することで、多角的かつ多面的な視野に基づくものの見方・考え方が養われる。

「説得力のある構成を考えよう スピーチで社会に思いを届ける 資料 リオの伝説のスピーチ」では、「リオの伝説のスピーチ」等の事例を通して、聞き手の心に届くスピーチは、人々の価値観や行動に影響を与え、社会を変える力になることを理解させ、話の構成を工夫し、話す・聞く力を養うことができる。

(3) 生徒観

対象生徒の国際教育に関する理解度や態度等の予備調査として、潘・義永 (2014) の「日本人中学生の異文化受容態度とその関連要因—米国・中国との比較から—」で使用されているアンケートならびに筆者が独自に作成した海外に対する自由記述を用いて、授業実践前の 3 学年に所属する全員を対象に調査した。本稿では、予備調査内の

「海外経験」「外国の知人」「メディアへの関心」「国際理解教育経験」「外国語への関心」「外国語の得意さ」のみを取り上げることとする。

なお、本アンケート調査は対象生徒が2学年の時（2023年2月）に行ったものである。

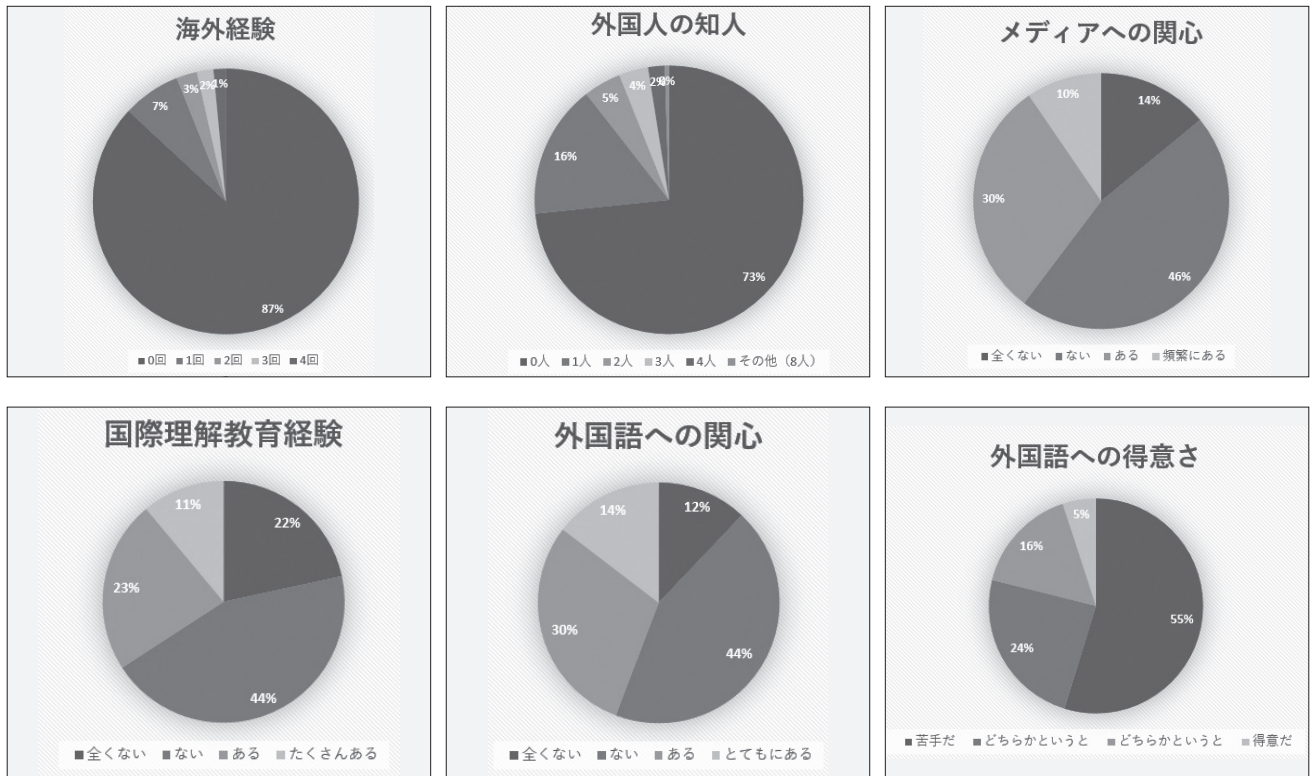


図 1. 事前予備調査結果 (n = 199)

対象生徒は、異文化に対する理解度や態度等が低いということがいえる。そのため、本授業実践を通して生徒の「①地域、グローバルそして異文化の問題を考察すること」「②他者の視点と世界観を理解し、その価値を認めること」の能力育成を図っていく。

(4) 授業実践の計画

全6時間計画で授業実践を行った。各時の具体的な内容として以下の表に示す。

表 2. 単元計画

時	主な学習活動
1-2	「作られた『物語』を超えて」の内容読解を行い、論の構成を捉える。
3	アイスブレイクを行う。フォトランゲージ①を行う。
4	フォトランゲージ②を行う。住みたい国ランキングを決める。リオの伝説のスピーチを聞く。
5	「よりよい社会・暮らしをするために」「自分には何ができるか」ということをテーマとした、スピーチの題材 chrome book を使って調べる。スピーチ原稿を作成する。
6	原稿を発表

第3・4時では、生徒の持っている異文化への偏見に気づかせるために、2時間にわたって「フォトランゲージ」を行った。フォトランゲージとは、写真の中の人物や背景からその状況や人物の気持ちを読み解き、それをグループで話し合うことを通して多様な捉え方に触れ、自身の思考を深化させるという手法である。それにより、①共感的な理解や想像力を高め、②物事の多様な捉え方に気づき、③無意識のうちに持っている偏見や固定観念に気づき、

④メディアに対して批判的な見方が出来るようになる（開発教育協会 2012）。今回の授業実践では、インド・タンザニア・ブラジル・モンゴル・台湾・イランの6つの国の写真を使用した。また、教科書と関連させて自分たちが知っていることはほんの一部であり、メディアによって「物語」が作られているという筆者の主張への理解を深めさせるため、第3・4時で同じ国だが全く雰囲気の異なる写真を用意した。フォトランゲージの実施方法としては、まず写真を見て気づいたこと、感想、疑問を多く書かせた。次に、写真がどの国を示しているかを考えさせ、その根拠とともに発表をさせた。最後に、教員から写真の国の名前や状況を説明した。生徒は、第3時の教員の説明にて、国の印象を決めつけているため、第4時に用いられている写真の国が第3時と同じであると考えた生徒はおらず、「自分たちは勝手にその国に対して偏見やイメージを作っていた」と振り返りシートにて記述している生徒が多数であった。第4時ではそれに加え、より他者の立場を理解するという目的の下、授業実践で提示した12枚の写真の中から自分が住みたい国ランキングベスト3を選ばせた。

第5時では、まずスピーチの方法や構成を捉えさせた。生徒の振り返りシートの中に、住みたい国ランキングやその国のことを考える上で、「日本はとても裕福で良い国」という記載が多かったため、日本のSDGsの状況について説明し、日本においても問題は多く顕在しており、より良い暮らしをすることができることを捉えさせた。

4. 調査方法

本研究では、授業実践の開発に加え、その有用性を検証することも目的としている。ゆえに、本章では、前述したグローバルコンピテンスの「①地域、グローバルそして異文化の問題を考察すること」「②他者の視点と世界観を理解し、その価値を認めること」の目標が達成されたか否かを確認することで、本授業実践の有用性の検証を試みる。第一に、実践した1クラスのスピーチ原稿と、実践していない1クラスのスピーチ原稿をループリック評価し、その集計値を検討する。第二に、実践した2クラスの振り返りシートを用いて、生徒の授業を通しての変容を検討する。

表 3. ループリック評価

評価規準	1 (低次)	2 (標準)	3 (高次)
知識	・他文化に関して知識がない (例：記載なし)	・他文化に関して知識がある。	・他文化に関して知識があり、それらを明確に説明している。 ・地域、グローバルそして異文化の問題を理解している。
能力 (思判表)	・他者の視点に立てていない (例：ステレオタイプで物事を捉えている。または記載なし)	・他者の視点に立っている。	・他者の視点に立ち、地域、グローバルそして異文化の問題を考察している。
学びに向かう力 (主体性)	・地球規模課題に対し、解決策が考えられていない。 ・学習に興味がない	・地球規模課題に対し、実用的初歩的な解決策を考えようとしている。	・地球規模課題に対し、集団の幸福と持続可能な発展のために、解決策を考えようとしている。(SDGsの観点)

注：生徒の学力の状況や原稿の全体的な出来から、授業実践目標に合わせ本ループリックを作成した。

5. 結果及び考察

(1) スピーチ原稿比較による調査結果

上記のループリック評価表に照らし合わせて、生徒が書いたスピーチ原稿を評価した。

筆者が授業実践したクラスでは、フォトランゲージで学習した6か国の中から1つ国を選び、その国の人達が「よりよい社会・暮らしをするために」「自分には何が出来るか」ということをテーマにスピーチ原稿を作成し、非実践クラスにおいても、授業担当教諭がテーマを「世界で起きている事柄」としていた。スピーチテーマを2クラス

とも「世界の事柄」としているが、筆者が授業実践したクラスが「知識」「能力」「学びに向かう力（主体性）」全ての評価項目において高い数値となった。実践クラスでは、「よりよい社会・暮らしをするために」「自分には何ができるか」をテーマとしたため、対象生徒は選んだ国の状況をよく調べ、具体的な方策を考えていたことから、「知識」項目において評価3（高次）、「学びに向かう力」項目において評価2（標準）が多くいたといえる。その反面、「能力」項目における「他者の視点に立っている」という評価項目は、スピーチ原稿に「他者の視点に立つ（例えば、「〇〇の立場に立つと～」など）」という内容を記載している生徒があまり見られなかった。

しかし、非実践クラスと比較すると授業実践クラスは、「①地域、グローバルそして異文化の問題を考察すること」「②他者の視点と世界観を理解し、その価値を認めること」の目標が概ね達成できたといえる。

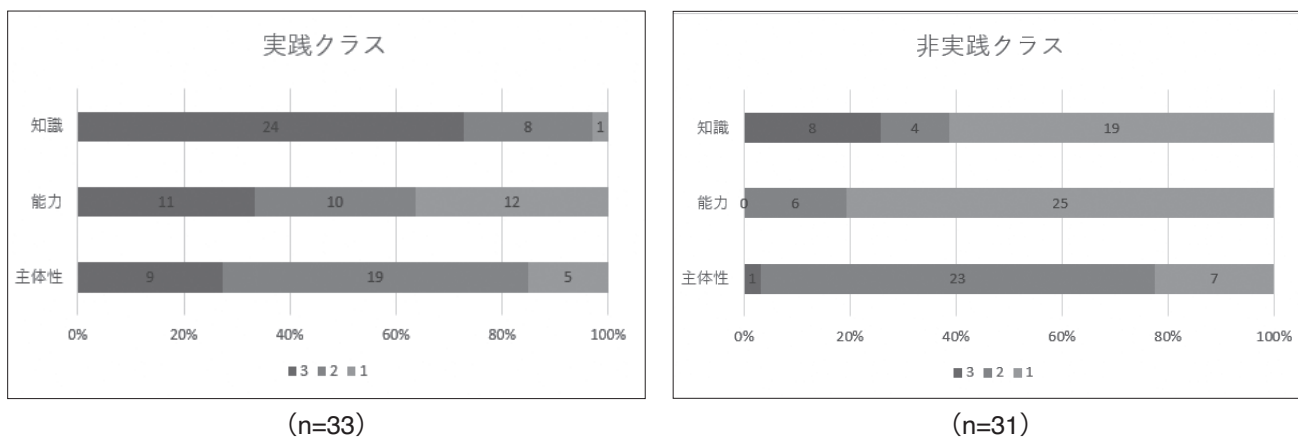


図2. ルーブリック評価集計値

(2) 振り返りシートによる調査結果

本稿においては、用紙の関係もあるため、2クラス無造作に抽出した各1名ずつの振り返りシートを記載する。

表4. 振り返りシート（Aクラス生徒32番）

時	振り返り内容
3	今日私の班では、アフリカの人達の写真を見て、ふせんを貼っていきました。写真1つで色々なことを想像するのは楽しかったです。目で見えて情報を得ることは大切だなと思いました。
4	今日は、前回と同じ国だったけれど、それに気が付くことが出来ず、疑問を持ったりしました。そういった考えが「物語」を作ってしまう、大きな誤解になっていくと実感しました。細かい部分も理解できるようになっていきたいです。
5	今日私はインドについてを調べました。インドでは汚染や貧困の問題が深刻となっていることが分かり、SDGsの17の中からインドに最適なものを探し、インドのより良い生活になるためにものを考えたいです。
6	スピーチを聞いて、やっぱり私達は写真を見ただけで多くの偏見を感じてしまうんだなと思いました。さらに私達にできることを聞いて、規模の大きなことは出来ないけど、小さなことでもできることはあるとわかりました。スピーチでももう少し前を見て言えたらなと思いました。

本生徒は、第3時のフォトランゲージの際では「目で見えて情報を得ることは大切」と記載していることから、教科書を通じて学んだ「メディアによって「物語」が作られている」について理解が出来ていない状態であるといえる。しかし、第4時では学習を通して自分の考えを省察し、教科書の内容だけでなく、異文化についても学習内容が深められている。第5・6時では「インドのより良い生活になるために」と他者の視点に立ち、「汚染や貧困の問題」「SDGs」と異文化の問題を考察しようとしていることがわかる。よって、本生徒の「①地域、グローバルそして異文化の問題を考察すること」「②他者の視点と世界観を理解し、その価値を認めること」の能力育成は図れている結果である。

表 5. 振り返りシート (B クラス生徒 5 番)

時	振り返り内容
3	今日は写真で遊びました。中国だと思っていたけど、実は台湾でした。でも楽しかったので良かったです。
4	台湾は、勝手にああいう変な服は着ないって決めつけていたことがわかりました。自分で「物語」を作ることは良くないなと実感しました。
5	僕は、タンザニアの社会問題について考えました。自分の国じゃない国について考えるのは、むずかしかったです。それこそ相手の立場におきかえて考えるということなので、がんばりたいです。
6	学習全体を通して、僕たちは、いろんな「物語」にだまされているんだと気づきました。タンザニアと聞いたときに、僕はびんぼうな国がおもいうかびました。「物語」にはたよらず生きていきたいです。

本生徒は、第3時のフォトランゲージ活動を「遊び」「楽しい」と表現していたが、第4時では「決めつけ」「自分で「物語」を作ることはよくない」と学習内容を深めている様子が見える。第5・6時でも、学習内容に対して難しさを感じているが、学習を進めていくうちに自分の考えを省察し、「相手の立場に置き換えて考える」など「②他者の視点と世界観を理解し、その価値を認めること」の能力育成が図れているといえる。しかし、本生徒の振り返りシートからは「①地域、グローバルそして異文化の問題を考察すること」についての記載がないことから、振り返りシートだけでは「①地域、グローバルそして異文化の問題を考察すること」の能力育成が図れたとは言えない結果である。

(3) 授業実践考察—国語科における国際教育実践の意義

前掲の分析結果より、スピーチ原稿比較による調査結果では、授業実践クラスにおいて選んだ各国の実態のみを記載している生徒が見られるなど、ループリック評価の知識項目で評価3の生徒が多数であった。

そこで、なぜこのような知識項目が突出しているのか理由を考察したところ、事前アンケート調査の結果より、対象生徒の異文化に対する理解が低いことから、授業実践第3・4時でフォトランゲージで用いた6つの各国に対する基本情報が少なく、第5時での各国の実態調べに時間を要した。そのため、異文化についての理解はできたが、異文化の問題を考察し、他者の立場に立って具体的な解決策を考える生徒が少ない結果となったと考える。しかし、非実践クラスと比較すると本授業実践が「国語科における国際教育」として有用的であることは顕著である。

公立中学校での授業において1つの授業単元に対して、多くの授業時数を確保することは難しい。そのため、国語科の1つの単元だけで「グローバルコンピテンシー」の育成は十分ではない。そのため、本授業実践を通して、他教科や総合的な学習の時間などと教科横断的に学習を進めるとより深い国際教育の学習が出来るだけでなく、グローバルコンピテンシーの残り2つである「③異文化の人々とオープンに適切かつ実効性のある意思の疎通を行うこと」「④“well-being”と持続可能な発展のために行動を起こすこと」を育成することも可能ではないだろうか。

6. おわりに

本研究では、公立中学校国語科における国際教育の開発と実践とその有用性の検証を試みた。その結果、本授業実践は、「①地域、グローバルそして異文化の問題を考察すること」「②他者の視点と世界観を理解し、その価値を認めること」の国語科における国際教育の授業実践の目標を達成することが出来た。このことから、本授業実践の成果をより多くの学校へ広めることが出来れば、「グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成」に向け、国語科における「授業実践」の課題は解消することが期待できる。今後の課題として、「いかに他教科や総合的な学習の時間と連携していくか」という観点からの授業開発を行うことで、引き続きより有効な国語科における国際教育の教育実践の提示をめざしていきたい。

謝辞

本授業実践のために受験期である中学3年生に対し、自らの授業時数を調整し6時間という時間をいただき、積極的に協力してくださった担当教諭の先生方へ、この場をお借りし厚く御礼を申し上げます。

引用文献

- 文部科学省「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」, 1996
文部科学省「これからの時代に求められる国語力について」, 2004
文部科学省「初等中等教育における国際教育推進検討会報告—国際社会を生きる人材を育成するために」, 2005
文部科学省「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ」, 2016
文部科学省「第4期教育復興基本計画について」, 2023
OECD「Global Competency for an Inclusive World」(最終閲覧日 2024年1月6日)
<https://www.oecd.org/pisa/aboutpisa/Global-competency-for-an-inclusive-world.pdf>, 2016
潘英峰・義永美央子「日本人中学生の異文化受容態度とその関連要因—米国・中国との比較から—」, 異文化間教育 40号, 2014, 138-149
開発教育協会『開発教育実践ハンドブック参加型学習で世界を感じる』, 開発教育協会, 2012

参考文献

- 寺本学「国語科における国際理解教育単元学習への試み」, 島根大学教育学部附属中学校研究紀要 37, 1995, p.57-82
鶴田清司「国際化の中で求められる国語力とは何か—PISA型読解力から対話能力の育成へ」『浜本純逸先生退任記念論文集 国語教育を国際社会へひらく』, 溪水社, 2008, 29-39.
光野公司朗「国際化・情報社会に対応する国語科教育—論証能力の育成指導を中心として—」, 溪水社, 2003

公立初中日本国语课国际教育的开发与实践

西 千 裕, 吉 田 夏 帆

(兵庫教育大学大学院, 兵庫教育大学)

根据『第4期教育振興基本計画』(文部科学省 2023), 为全球化社会的可持续发展培养不断学习的人才是提到教育政策之一。因此, 不只综合时间还需要其他课程里意识国际教育的指导。

其中特别期待的是充实着外文教育和国语教育。但在学校环境中国语课方面的国际教育面临许多课题。本研究旨在兵库县公立A学校的为例, 针对公立初中国语课开发更有效的国际教育单元为目标。具体来说, 第一个是从3个年级在课本中选泽适合国际教育的教材, 才确定教学实践的教材和年级。第二个是对对象年纪的学生进行预备调查, 然后在教学实践前确认学生对待文化的态度。根据预备调查的结果, 我开发有助于促进异文化理解的国语课国际教育单元。

之后我实践开发的单元。此结果, 我考察对象学生有没有变化对异文化的态度。关于本研究的详细结果将在研究集会上进行报告。

Development and implementation of international education in public junior high school Japanese language departments

Chihiro NISHI, Kaho YOSHIDA

(Hyogo University of Education Graduate School, Hyogo University of Education)

The “Fourth Basic Plan for the Promotion of Education” (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology 2023) lists “developing human resources who continue to learn for the sustainable development of a globalizing society” as one of the basic principles of education policy. Therefore, it is important to provide instruction that takes into account the elements of international education not only during comprehensive study time, but also in each subject, and in particular, the enhancement of international education in foreign language education and Japanese language education is especially awaited. However, there are many challenges in implementing international education in Japanese language classes in schools. The purpose of this research is to develop more effective international education units in Japanese language classes using a public junior high school in Hyogo Prefecture as an example. Specifically, we will first select teaching materials suitable for international education from the Japanese language textbooks for three grades, and then decide on the target materials and grades for class practice. Next, we will conduct a preliminary survey of students in the target grade to confirm their attitudes toward other cultures before the lesson begins. Based on the results of the preliminary study, we will develop international education units in Japanese language classes that will contribute to promoting cross-cultural understanding. Afterwards, we will put the developed unit into practice and examine whether there are any changes in the target students’ attitudes toward other cultures as a result. Details of the results of this study will be reported at the research meeting.